



アメリカの動物園を訪ねて

平成20年3月3日から10日までアラバマ州バーミングハム市へ行ってきました。地元のバーミングハム動物園がホスト役となりアメリカの動物園水族館協会地域会議が行われたのですが日立市とバーミングハム市は姉妹都市の関係にあり、その縁で日立市のかみね動物園も招待を受けました。市長表敬訪問をはじめ会議でのスピーチやプレゼンテーションなどの合間を縫って動物園めぐりも行事の一環でした。今回はそのアメリカ訪問で感じたことをちょっと紹介します。

滞在中まわった動物園はバーミングハム動物園、モントゴメリー動物園、アトランタ動物園の3か所でした。たった3ヶ所でもアメリカの動物園を語ろうとは思いませんがやはりそこには日本とは違う共通した何かを感じられました。

モントゴメリーでは広い敷地にキリンやシマウマ、レイヨウ類がまさにアフリカのサバンナを切り取ったような草原にのびのびと暮らしていました。そのため入園者から見ると動物が遠いといった印象は否めませんが、だからといって見に来たお客様が不満を持っているようには見受けられません。当然のことと受け止めているのでしょう。

かみねも含めて日本の場合、動物をいかにお客様に楽しんで見てもらうかという視点が大勢を占めているように思います。私たちも展示という表現を使いますが、博物館的な、もっと俗な言い方をすれば見世物小屋的な感覚がどこかにあるような気がします。それは見に来る人間のことを考えているからです。

しかし今回まわったアメリカの場合もっと大らかな気配が濃厚に感じられました。動物たちは客の向こう側で実に悠々と暮らしている。もちろん、そこを訪れる人がいてはじめて成り立つ商売ですから見せることにも気を配っていますが、今回行ったアメリカの動物園ではいかに動物にストレスを与えずそこで生活してもらうかといった動物の立場からの視点が大きいと感じました。もちろん日本でも動物の立場からの獣舎づくりや環境エンリッチメントといった動物福祉を優先する考え方も広まってきています。また国土の広さからくる園内の広さも大きく作用しているとは思いますが、ここではどちらがいい、悪いという話ではなくうらやましく感じたということです。

また、アフリカゾウの赤ちゃんが平成19年の11月に生まれそのへんをチョコマカと駆けずり回っていたのですがここではオスメスを分けずに飼育しています。日本では発情期のオスの激しい行動を考慮し、メスとは分けて飼育展示するのが一般的なのですがここでは一緒に飼育しています。また、夜も余程の寒さや雨にでもならない限り獣舎へは収容しないとのことです。何故か、それが自然だからです。オスメスの疑問もぶつけたところ、「一緒に飼えばむしろ凶暴にならない。発情したらそこにメスがいます。ただそれだけのことだ。」というこれまた自然体の答えでした。間接飼育と徹底した繁殖プログラムに裏打ちされた自信の表れなのでしょうがなんともうらやましい限りでした。

このほか、雑木林をそのまま残した感のあるバーミングハムやなんと23頭ものゴリラがそれぞれの群れをつくって生息するアトランタ（日本の動物園全部集めても30頭。）など話したいことは山ほどあるのですが紙面もつきましましたのでまたの機会にでも紹介できればと思います

す。最後にアメリカ南部の人間は皆気さくでいい人たちばかりでした。南部料理のジャンバラヤやガンボもSo Goodでした。

平成20年3月30日 園長 生江信孝



モントゴメリー動物園



アトランタ動物園



バーミングハム動物園

2008年3月30日

過去の一覧

[令和6年](#)